

着実に進む水資源開発

一、水の安定供給のために



渇水関連記事

水資源開発の重要性
 ちょうど一年前の平成十六年三月は、渇水による給水制限の実施が間に迫っている時期でした。沖縄本島における平成十五年の降雨量は、平年値の七十一%と低く観測史上六番目となる渇水年であったことから、平成十六年当初から沖縄本島の水不

足は深刻でした。幾度となく渇水連絡協議会が開催され、県民に対し更なる節水を呼びかける非常事態となり、三月末には平成六年以来十年振りとなる給水制限を実施せざるを得ない状況に至ったことは記憶に新しいところです。直前の降雨により給水制限は緊急回避されましたが、十年間断水の無い日々を過ごしてきた県民の皆様にとっては、水資源開発の重要性を改めて認識させられる出来事でした。

沖縄の水事情

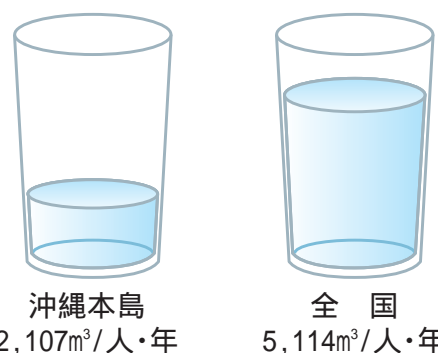
沖縄県は、我が国唯一の島嶼県で他府県に比べ面積が狭く、大きな山地がありません。従って河川は流域面積が小さく、流路延長が短い上に河川勾配が急であるという特徴を持っています。また、毎年沖縄は台風の来襲を多く受けます。台風が沖縄近海を通過する頃は勢力が強く、速度も遅いことから降雨量が四百〜五百ミリの豪雨になることがあります。こうした地理的条件から、豪雨時は鉄砲水となって流出し、流域に大きな被害をもたらしてきました。また、河川の流量が著しく変化し、安定した水資源確保が難しい状況にあり、本土復帰以前から毎年のように渇水被害に見舞われてきました。

水資源開発の現状

沖縄本島の人口は、戦後二倍以上になり、その九十%以上が中南部に集中しているため、北部の水源で開発された水を中南部に送り、消費するという形態になっています。

沖縄本島の年間降水量は本土よりも多いのですが、人口密度は約三倍になるため、一人当たりの平均降水量は本土の半分以上になっています。また、水利用に占める生活用水の割合が非常に高く、特殊な水の利用形態となっています。

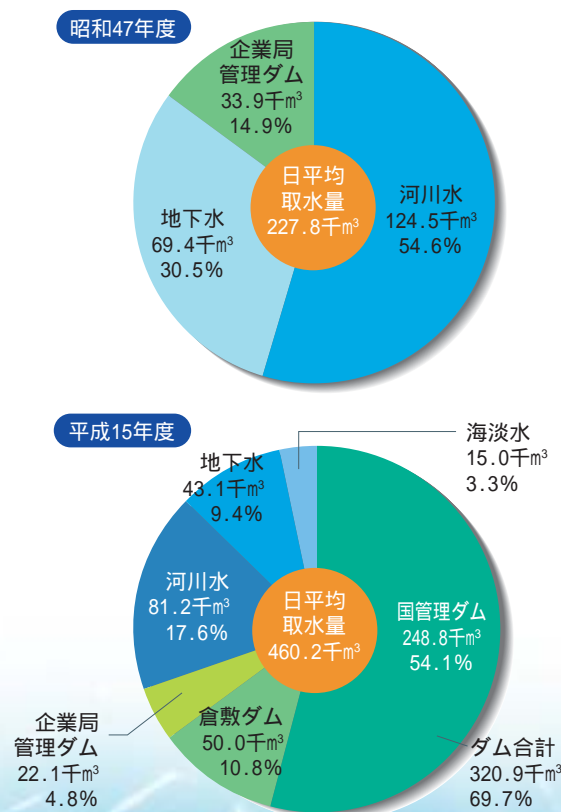
1人当たりの平均降水量



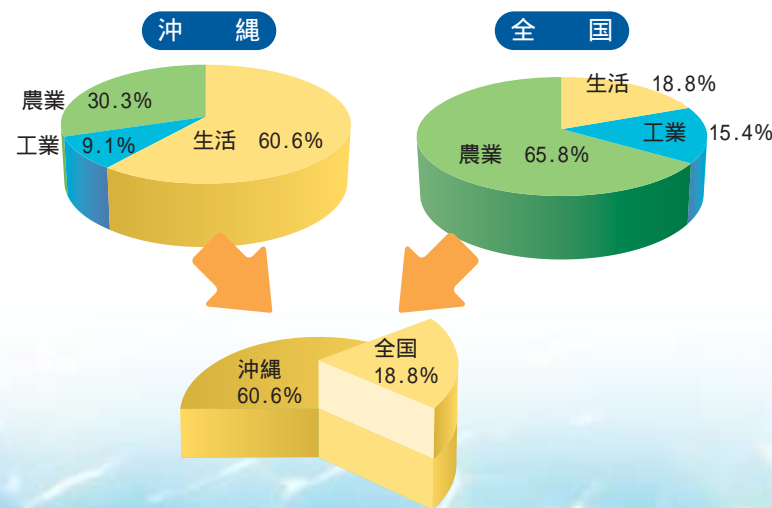
態となっています。

本土復帰時（昭和四十七年）、ダムによる安定水源の割合は日平均取水量の十五%にすぎませんでしたが、平成十五年度には国・県等管理ダムによる安定水源からの取水割合が七十%近くにまで改善されました。しかし、河川からの不安定取水の割合は依然として高く、少雨傾向で河川水が減少すると、供給量は不足し、水需給バランスが崩れ渇水状態となります。昭和四十七年の復帰前後、毎年のように起こっていた給水制限は、その後の水資源開発施設の整備とともに改善され、昭和五十六年から五十七年にかけての大渇水以来、隔日断水はあったものの、国管

昭和47年度と平成15年度の水資源内訳



生活用水割合の比較 「(平成15年版)日本の水資源」より



着実に進む水資源開発

二、羽地ダム竣工式

沖縄総合事務局北部ダム事務所が、沖縄本島北部の名護市郊外を流れる羽地大川水系羽地大川に、沖縄

本島の水資源開発の一環として建設を進めてきた「羽地ダム」の竣工式が、平成十七年一月十二日に執り行われました。



羽地ダム全景

この度竣工を迎えた羽地ダムは、本土復帰後三十三年間で、北部ダム事務所が建設してきた八ダム目の直轄多目的ダムです。

羽地ダムは、羽地大川の洪水調節、かんがい用水の安定供給及び沖縄本島の新たな水道用水の確保などを目的として、昭和五十六年度から建設事業に着手し、平成八年三月本体工事着工。平成十年十月から堤体盛立を開始し、平成十二年三月に盛立完了。また、平成十三年七月から試験湛水を開始し、平成十六年六月に完了しました。

竣工式典には地権者の方々を始め、内閣府大臣政務官、国土交通省河川局企画専門官、沖縄県副知事、名護市長、地元選出国會議員、北部ダム事務所在職職員他約二百人余りの参加がありました。

始めに、主催者の竹林義久沖縄総合事務局長の式辞に続いて西銘順志郎内閣府大臣政務官からの挨拶、塚原浩一企画専門官より国土交通大臣の挨拶代読があり、来賓を代表して嘉数昇明沖縄県副知事より知事祝辞の代読がありました。その後、横森源治北部ダム事務所長



式辞（竹林義久沖縄総合事務局長）

より工事経過報告、来賓紹介と続き、最後に羽地ダムの建設にあたり事業の重要性をご理解頂き、積極的に協力・貢献頂いた名護市及び羽地ダム対策地主協議会並びに羽地大川ダム対策委員会に対し竹林局長から感謝状の贈呈がありました。その後、会場をダム堤頂に移し来賓の方々とは沖縄総合事務局代表者により、記念植樹、記念放流、くす玉開披が行われました。

記念放流では、スイッチを押すと同時に維持放流設備用の引張りラジアルゲートから勢いよく水が噴出する模様がモニターに映し出され、浅層曝気装置を兼ねた噴水が高々と打ち上がりました。

記念行事の最後に、渡口潔沖縄総合事務局次長の発声で万歳三唱が行われ、出席者全員で羽地ダムの竣工を祝いました。



挨拶を述べられる西銘順志郎内閣府大臣政務官



万歳三唱（渡口潔沖縄総合事務局次長）



くす玉開披

三、大保ダム（脇ダム）定礎式

平成十七年二月十三日、大宜味村に建設中の大保ダム（脇ダム）において、地元関係者や行政関係者及び工事関係者等約百五十名が見守る中、定礎式典が執り行われました。

当日は、北部ダム事務所長の式



礎石搬入

辞に始まり、沖縄総合事務局次長の挨拶、沖縄県企画開発部地域・離島振興局長および地元の大宜味村長から祝辞をいただきました。その後、北部ダム事務所長の先導のもと、国頭サバクイの演奏に合わせてダム事務所職員、施工業者約三十名により礎石が搬入され、「鎮定の儀」、「斎槌の儀」、「埋納の儀」と順次、厳かに執り行われました。

盛立式では、ダンプロックから投入された盛立材料をブルドーザで敷均し、振動ローラで転圧を行いました。その後、くす玉が開披され、同時に地元の保育園児により風船が放たれると、出席者全員による万歳三唱の声が大保ダムサイトに鳴り響きました。最後に地元の青年団による力強いエイサーの演舞があり、式典は滞りなく終了しました。

これから脇ダム工事は最盛期に入り、脇ダム堤体は平成十八年度、本ダムを含めた大保ダムは平成二十一年度の完成を予定しています。



くす玉解披



鎮定の儀